

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	なかた ひでき 中田 英樹	所属・職名 グローバル COE 研究員
e-mail	hidekinakata@socio.kyoto-u.ac.jp	
発表題名 (英語)	"From Men of Maize to Men of Coffee"; Integrating the Mayan Indigenous Culture in the 21 st Century Multiculturalism in Guatemala	
著者名	中田 英樹	
会議名 (英語)	Asian Rural Sociology Association, 4 th International Conference, <i>The Multidimensionality of Economy, Energy and Environmental Crises and their Implications for Rural Livelihoods</i>	
開催地(国、市)	Legazpi City, Philippines	
参加期間	2010年9月6日 ~9月10日	
<p>フィリピンのレガスピで開催されたアジア農村社会学会の第四回国際学会に参加してきました。1996年に設立されたこの学会は、おもには日本からの研究者が中心となって牽引してきたものの、この第四回大会においても、タイやインド、シンガポールや中国といったアジア諸国や、ポルトガルやカナダなど欧米諸国から数多くの研究者が参加されていました。</p> <p>この国際学会において私は、「トウモロコシの人間たちからコーヒーの人間たちへ ——二一世紀多文化主義のグアテマラにおけるマヤ系先住民の文化統合」と題し、発表を行ってきました。大半の発表がアジア諸国を対象（「アジア農村社会学会」だから当然だが）にするなか、ほぼ唯一と言ってよいラテンアメリカを対象とした私の発表は、ともすればイメージしにくいいため、できるだけ写真を多く混ぜたパワーポイントでの発表を心がけました。そのためか、事例の内容は好評だったのですが、コメンテーターも仰ったように、事例を解釈する理論的考察が弱く今後の課題として残りました。</p> <p>大会全体としましては、他のアジアなどの研究者と比して、多くの日本の研究者は（もちろん私も含めて）英語力が極めて乏しいということを強く感じました。研究者として熟成され経験を積んでいくことに、英語で論文を書き海外で英語の発表するということをともすれば余儀なくされるアジア諸国からの研究者とは異なって、日本ではアカデミズムの大きさから、そうした必要性はきわめて低く抑えられます。今後、英語での国際学会などでの経験を積んでいくことがとても大切だと感じました。</p> <p>この国際学会の直前、フィリピンのマニラではバスジャックが起きました。そのため、学会でも厳重な警備が敷かれていました。安全性確保の面では、きわめて有難いホスピタリティであった一方、現地の日常と触れ合う機会に恵まれなかったのが、不運で残念だったといえましょう。</p> <p>ですが、大会後にはエクスカージョンもあり、若干ながらフィリピンを垣間見ることができました。毎日の夕食会には、地元大学の学生たちがすばらしいダンスを披露してくれました。例えばこのことは、フィリピンから数多くのダンサーが日本へと「興行」ビザで働きに来ていることと無関係ではないでしょう。こうした学会での「お勉強」以外の経験も、貴重だったと思っています。</p>		

学会発表渡航支援報告書

